

くじら日記

太地町立博物館から

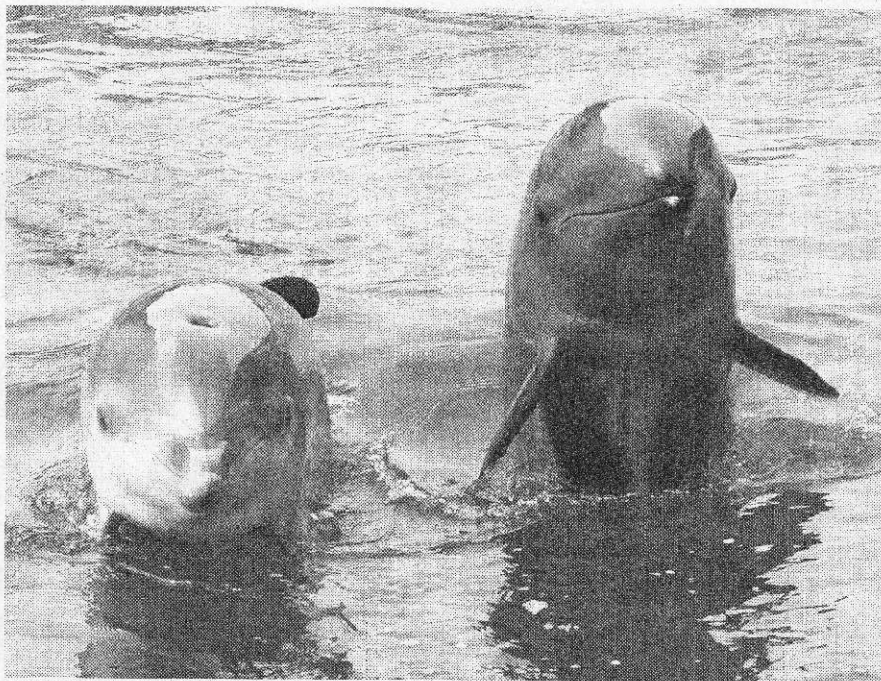


気温と水温の上昇に伴い、クジラたちの発情行動が観察できるようになりました。

雄はふだん腹部の生殖孔裂に収まっている性器を体外に出し、雌を追ったり、体を寄せたりします。雌は体を傾かせ、不自然に浮くことがあります。また、雌雄ともボーとしていてシヨールに身が入らず、口から餌がこぼれ落ちることがあり、この時期の飼育管理には手を焼きます。ただ新たな命が芽生えるかもしれないということに思いをはせられ、喜ばしい気持ちにもなります。

水族館の役割の一つに「種の保存」があります。長期飼育して健全に成長させ、交尾と出産をへて、新たな命が誕生します。この命をつなぐ繁殖を通して自然界の生息域外で「種の保存」をし、そして得られた知見を野生動物の保護保全に役立てることが期待

鯨類の繁殖①



令和元年に誕生したクジラたち—令和2年2月、太地町立くじらの博物館

されています。水族館の飼育環境下で自然繁殖させるためには、雌雄とも性的に成熟し、健康であることのほか、交尾や出産、育児に適した環境が不可欠です。

ベビーラッシュ 期待の1年

す。繁殖に成功するということは、適切な飼育管理と環境の証明であり、飼育員の誇りでもあります。水族館での鯨類の繁殖はいわば日進月歩の状況にあり、毎年いくつかのうれしいニュースがあります。国内で最も多く飼育されているバンドウイルカのほか、カマイルカ、シャチ、シロイルカ、スナメリなど繁殖種数は増加傾向にあります。そして近年の取り組みとしては自然繁殖にとどまらず、精液を採取、凍結保存して行う人工授精も注目されており、成功例も多く見られるようになりました。

くじらの博物館では、筆者が勤め始めた平成19年以降、約20頭のクジラが出産しましたが、全ての事例がうまくいったわけではありません。流産や死産があり、無事に誕生しても、事故や感染症で息を引き取ったこともありました。そのような経験から、繁殖方法を適宜見直していきました。また鯨類の繁殖に関する研究事例から多くの知見を得られました。この結果、くじらの博物館生まれのクジラも展示できるようになっています。

くじらの博物館では今年4月以降、1頭のクジラが誕生し、博物館が管理する町内の「森浦湾くじらの海」でもさらに1頭が生まれました。7月以降には3頭の出産を控えています。令和4年は、くじらの博物館にとって試練の年になりそうです。

今回から鯨類の繁殖について紹介したいと思います。
(太地町立くじらの博物館 館長 稲森大樹)

◇ 原則第1日曜日に掲載します。